



加瀬葉 Photo: E. Kauldhar

4月号の主な記事:エマージング・ダンサー・アワード

イングリッシュ・ナショナル・バレエの若手団員のコンクールであるエマージング・ダンサー・アワード。今年加瀬葉が優勝を飾りました。デボラ・ワイスの講評をお伝えします。

二回目を迎えるこのコンクールは、入団二、三年目頃までの若手を対象とし、タルボット・ヒューズ・マキロップ社の後援で開催されている。出場者六名は同団の団員とスタッフにより選出され、それぞれ二つのソロを踊る。審査員による選考とは別に、観客投票による賞が設けられているのも特色だ。今年の会場は、テムズ川南岸のサウス・バンク・センター内クィーン・エリザベス・ホール。審査員は芸術監督ウェイン・イーグリング、カルロス・アコスタ、デイル・ベリル・グレイ、ジェド・ケリー(サウス・バンク・センター芸術監督)、ジェフリー・テイラー(舞踊評論家)。開始に先立って各人のリハーサル中の映像と、カメラに向かって自分を語る様子が映しだされたが、これは彼らへの理解が深まるすぐれた趣向だ。加瀬葉は「とにかく、バレエが好きなんです」と締めくり、ワジム・ムンタギロフはクリーンな踊りを心がけつつ「観客を興奮させたい。でも「善良な人間であることも大事」と語る。彼はそのすべてを手に行っているというのが、私の受けた印象だ。

最初に登場したのは、『ジゼル』第一幕のソロの加瀬である。トップ・バッターというのは損な役回りである上、収穫の合間の村人たちも狩りの途中の貴族たちもいない中で解釈をきちんと示すことは難しい。だが彼女の表現にはきらめきがあり、技術的にも完璧だった。アルブレヒトの第二幕のヴァリエーションを選んだムンタギロフにしても困難な状況は同じで、先立つドラマなしにいきなり跳躍に入るのは至難の業。だが彼の技術、とりわけジャンプは驚くべきレベルにあり、またその全身からは誠実さがひしひしと伝わってきた。クセニア・オヴシャニクが一曲目に選んだのは、オディールのソロ。舞台での彼女の顔はじつに魅力的で印象が強く、技術的にも盤石で確信をもって踊りきった。同じソロを加瀬も二曲目に踊り、ともに立派な出来栄えだったが、面白いのは二人の持ち味が大きく異なっていたことだ。加瀬は歯切れのよいクリーンな回転、オヴシャニクは成熟が印象に残った。ジェイムズ・ストリーターとマックス・ウェストウェルは、いずれもベン・ファン・コーウェンベルグ振付のコミカルな『レ・ブルジョワ』を一曲目に選んだが、ここにも対照の妙があった。生来のコメディアンと呼べるのはストリーターの方だが、彼は技術も強い。ウェストウェルはテクニクに自

信があるが、一方では巧みにおかしさを引きだしていた。ロレッタ・サマースケールズはオーロラの第一幕のヴァリエーションを選択。要求水準が高く、ダンサーの人となりが見えなくなる踊りだが、輝くような表情と、フットライトを超えて客席にまで届く温和な魅力を印象づけた。アラバスクのラインなどにも技術レベルの高さがうかがえたが、彼女がよりリラックスして踊っていたのは二曲目のアルベルト・アロンソ振付『カルメン組曲』のソロだった。そしてムンタギロフの二曲目の『パリの炎』第二幕のヴァリエーションには、興奮させられた。普段の限界を超えて踊る彼の姿を見るのはじつにスリリングで、しかも空中に躍動するその身体には緊張の気配すら見られないのだ。オヴシャニクは『イン・ザ・ミドル』のソロで目が覚めるようなパフォーマンスを見せ、ストリーターは『ラ・シルフィード』第一幕のジェイムズのソロで軽々と跳躍と着地を繰り返し、清新な風を吹き込んだ。ウェストウェルも同様に、難易度の高い『ドン・キホーテ』を完璧なコントロールで踊りきった。

ムンタギロフの優勝を確信した観客は多かっただろうし、正直なところ私自身、他の出場者たちはコンクールという場に腰が引けているようにも感じていた。昨年以降、ムンタギロフはベテランのバレリーナ、ダリア・クリメントヴァの相手役として多くの演目の初日を飾るという重責を果たしてきた。おそらく審査員は、その彼をすでに“新進”の域を脱したと判断したのだろう。イーグリングが加瀬の名前を発表した際に一部に驚きが走ったのは事実だが、彼女もまたあらゆる意味で受賞にふさわしい。入団二シーズン目にしてこの才能は広く認知されるに足るもので、客席の反応も皆がそう感じていることを示していた。感極まった加瀬に代わり、イーグリングはこうスピーチした。「葉は言葉もないようですが、ダンスがいいのは、言葉などまったく必要ないこと。これまで通りに歩みを進めてください！」観客賞を射止めたアントン・ルコフキンも、嵐のような拍手を浴びて表彰を受けた。どのダンサーも同僚から温かくサポートされているのがわかる。最近何かのハリウッド映画に描かれた、嫉妬にかられた足の引っ張り合いなどとは無縁なのだ。じつに心躍るコンクールであり、イーグリングは配下にこうした人材が集っていることを大いに誇るべきだ。(訳:長野由紀)